年次報告書

国際環境NGOグリーンピース・ジャパン

2020

© Taishi Takahashi / Greenpeace

2020年を振り返って

2020年は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大により、私たちの生活から社会規範までを一変させる一年となりました。生態系の破壊によってこうした未知のウイルスとの接触機会が増える可能性が指摘されるなど、私たちの健康や公衆衛生が、地球環境と深く関わっていることを再認識した方も多かったのではないでしょうか。

緊急事態宣言の発令や外出自粛要請を受け、みなさまの生活にも大きな変化が訪れたことと思います。グリーンピース・ジャパンでも、在宅勤務に切り替えましたが、普段から海外のオフィスとテレビ会議を行なっていたため、大きな混乱もなく、移行ができました。

また、気候変動に関連する異常気象や山火事、豪雨や熱波など、私たち人間のあり方を見直さなければと改めて考えさせられる1年ともなりました。2019年9月に発生して以来、オーストラリアでは前例のない規模の山火事で1,100万ヘクタール近くが焼け、10億匹以上の動物が命を落としました。この規模の火災は気温が3度上昇した世界では当たり前になると言われています。

また、北極圏でも山火事が発生して燃え続けました。2020年6月20日、地球上で最も寒いと言われる街ベルホヤンスクで摂氏38度を観測。北極圏の過去最高気温となりました。

気温が1度上昇するごとに、海からの水蒸気が増え、大気中の水分量が7%増えるという研究もあります。気温の上昇を止められなければ、豪雨や洪水はさらに悪化します。熊本県でも、2020年7月豪雨の影響で、洪水や土砂崩れが発生し、広い範囲で甚大な被害をもたらしました。被害に遭われた方々に、心よりお見舞い申し上げます。

グリーンピース・ジャパンでは、2020年も地球温暖化とその影響で起きている気候変動を食い止めるため、様々なことに取り組みました。世界最大レベルの二酸化炭素排出国でもある日中韓3カ国が温室効果ガス排出実質ゼロを目指す「ネットゼロ宣言」をしたり、石炭火力発電に出資しているメガバンクと時間をかけて対話を続け、三菱UFJフィナンシャルグループ、みずほフィナンシャルグループ、三井住友フィナンシャルグループが新規石炭火力事業への投融資停止を発表したりしたことは、皆さまとともに実現した成果です。

さらに、2020年は「ファッションと環境」というテーマにとって、特別な意味のある年でした。グリーンピースが、2011年から10年間に渡って展開した『デトックス・キャンペーン』において、世界の80ものブランドが、2020年までに有害化学物質の排出をゼロにすることを目指してきたからです。

日本では、ユニクロを展開するファーストリテイリングの柳井正社長との面会や経営陣との議論を経て、同社は全ての有害化学物質の使用と排出を2020年までに全廃すると2013年に発表しました。同社は2020年末時点で、99.8%以上の排水基準遵守率を達成したと発表しています。今後もグリーンピース・ジャパンは企業の取り組みを見守って行きます。

グリーンピースは、2021年に創立50周年を迎えます。全世界が手をとりあって、二酸化炭素排出実質ゼロ（カーボンニュートラル）への行動を加速させる重要な年となります。市民の後押しでカーボンニュートラルを表明する自治体数を全国に増やしながら、2030年までの中期目標を引き上げるため、日本の気候目標への提言なども積極的に行います。また、温室効果ガス排出や環境汚染の原因である使い捨てプラスチックの大幅削減の方針をとるよう、日本企業へのはたらきかけにも力を入れていきます。

地球の恵みを、100年先の子どもたちに届けるためにも、これからもぜひ、グリーンピースと一緒に行動してください。

© Dermot Killoran / Greenpeace

S. Annesley

グリーンピース・ジャパン
事務局長　サム・アネスリー

7,725 寄付サポーター数

3,601 イベント参加者

1,486 ボランティア数

1,690,847 ウェブサイト総閲覧回数

2,721 メディアで紹介された件数

数字で見る2020年

グリーンピースの活動を支えてくださった多くの皆さんに、心より感謝申し上げます。

© Daniella Zalcman / Greenpeace

活動報告

Climate & Energy

気候危機を止め安全で公平な社会を築く

© Greenpeace

グリーンピース・ジャパンは日本におけるエネルギーの考え方を変える重要な役割を担い、化石燃料や原発産業のソーシャル・ライセンスに疑問を呈し、再生可能エネルギーのソーシャル・ライセンスを強化する動きを広げました。こうした活動は、メガバンクによる石炭事業への新規投資の停止、太平洋への放射能汚染水の放出の決定延期、原子炉の再稼働延期につながりました。

新型コロナウイルスからのグリーンで公平な復興を求め、政府に提案書を提出しました。気候危機によって激化した九州の水害や、商船三井が関与するモーリシャスの石油流出事故に対しては、気候変動対策の緊急性を訴え、より安全で持続可能な社会のための新しいビジョンを提案しました。さらに、気候変動問題に関心のある市民や団体とより密接に協力をし、東京をはじめとしたゼロ・エミッション都市のための草の根の動きを作り出しました。

2020年9月、菅義偉首相は2050年までに日本をカーボンニュートラルにすると発表し、12月には「グリーン成長戦略」を発表しました。しかしながら、グリーンとは名ばかりでその道筋は依然として原子力と化石燃料産業に依存したままです。日本は2021年、エネルギー基本計画を決定し、2030年に向けた取り組みを国連に報告する予定ですが、気候危機の悪化を止め、地球上のすべての生命のためにより公正で回復力のある社会を構築するためには、原子力と化石燃料を含まない2050年のネットゼロ計画を政府に約束させることが重要です。

グリーンピース・ジャパンは、日本が2030年までに温室効果ガスを2010年比で少なくとも50%削減することを約束し、2030年までに再生可能エネルギーが少なくとも50%以上となる電源構成となるよう働きかけます。

3メガバンクに気候変動株主提案が実現、大きな一歩

2020年に行った主要キャンペーンの一つでは日本の大手金融機関と石炭産業の関係に着目しました。今後、石炭消費は構造的低下傾向にあると国際エネルギー機関が発表しているにもかかわらず、日本は世界に石炭火力発電所への融資を提供する主要国の一つです。

2019年のCOP25から生じた原動力を活かし、メディアが石炭融資問題、特に日本のメガバンクの行動に着

目するよう、ダボスで開催された世界経済フォーラムでバナーアクションを行いました。その後、気候ネットワークなどの他のNGOと協力し、みずほファイナンシャルグループの株主総会で気候関連株主提案を提出しました。日本の大手金融機関でそのような提案が提出されたのは初めてでした。

提案は株主の34%に支持され、正式に採択はされなかったものの、3メガバンク全てがその後に石炭融資方針を改定し、原則として新規の石炭火力発電所計画への融資をなくすことを発表しました。当活動では、クレディ・スイス、ユービーエス AG、ダンスケ銀行を含む複数の法人株主と協力をし、KLP、ストアブランド、ノルデア銀行が株主提案を公に支持しました。

石炭融資と日本の金融機関の役割に関する2つの報告書も発表しました。7月にはグリーンピースが調査に協力した新報告書『Fool's Gold 』（石炭は黄金にあらず）を欧州のNGOネットワーク Europe Beyond Coal が発表しました。グリーンピース・ジャパンが協力した章では日本の銀行から欧州の大手石炭企業に流れる融資の流れについて調査しました。また9月にはグリーンピース・ジャパンとして『Fool's Gold 石炭は黄金にあらず　石炭投融資の継続は気候危機を加速させる日本のメガバンクに関する特別報告書』（日本版）を発表し、日本のメディアを対象としたウェビナーを開催しました。

12月には、菅義偉首相のネットゼロ宣言をうけて、グリーンピース・ジャパンは日本・中国・韓国の東アジア3カ国による海外の再生可能エネルギー市場への投融資転換について分析した調査報告書「脱炭素エネルギー投資が求められる東アジアの『ネット・ゼロ』」を発表しました。この報告書では、化石燃料を中心としてきた東南アジアにおけるエネルギー融資の歴史を分析し、再生可能エネルギー革命の先端にたつ今、日本・中国・韓国の大手金融機関は既存の路線を続けていては、投資機会を逃してしまうことを指摘しています。

© Masaya Noda / Greenpeace

© Masaya Noda / Greenpeace

市民の声が汚染水海洋放出を止めた

2020年は政府が東京電力福島原発敷地内に溜まりつづける放射能汚染水の処理方法を決定するとしていましたが、市民の声でそれをさせなかった年となりました。

1月に経済産業省の小委員会が海洋放出または水蒸気放出の2案に絞り込み議論を終えたことに対し、声明を発表し、パブリックコメントを広く周知し提出を呼びかけました。提出された4,000件超のうち、2,700件が安全性への懸念を示すものでした。パブリックコメントの期間が3回延期されたことも異例といえます。

これまでもおこなってきた国連特別報告者らへの情報提供を継続し、6月に複数の特別報告者が連名で汚染水放出の決定プロセスについて人権が守られていないと声明を出しました。

10月には他団体と共同で国際署名を開始しました。さらに同月、報告書『東電福島第一原発　汚染水の危機2020』を発行し、汚染水にはトリチウムだけではなく、長寿命の放射性核種も大量に含まれていることを指摘しました。東電の放射性核種除去装置の欠陥を取り上げ、陸上保管を続けながら放射性核種除去技術を開発することを提言しました。さらに、他団体とともに経済産業大臣に、海洋放出をしないよう求める要望書を提出し、共同で記者会見を開きました。

また、1年を通し、日本政府の温暖化対策が原発推進であることから、「原発は温暖化対策にならない」というコミュニケーションを活発におこないました。2019年におこなった3週間にわたる福島現地調査の結果を『終わらない汚染』として報告書にまとめ、2020年秋にはコロナ禍の影響もあり規模を縮小したものの、現地調査を継続しました。

ゼロエミッション東京、2050年脱炭素社会実現へ

本キャンペーンは、政府の「2050年脱炭素化」表明前に始まり、中央政府へ大きな影響力を持つ首都東京に着目し、東京都の「ゼロエミッション東京戦略」を活用しながら、東京のエネルギー移行アジェンダを進めるべく開始しました。まずNGO共同で東京都内自治体の電力調達の状況を調査し、報告書を発行し、報告イベントを開催しました。

また、東京都の目標達成には都内全62市区町村の取り組みが必要なことから、グリーンピースでは2020年9月にSNS上でコミュニティを立ち上げました。そこから20以上の市区町村別グループがうまれ、情報共有、勉強会、議会への陳情提出などを進めています。12月20日には、環境省・東京都・都民の三者の議論の場として「ゼロエミッション東京シンポジウム」をオンラインで開催し、132人が参加しました。

さらに、市民活動と並行して、グローバル市場調査会社イプソスに全国意識調査の実施しを依頼して発表したほか、脱炭素社会実現に向けた具体的なロードマップの策定や、2030年中期削減目標の大幅引き上げ、自然エネルギー産業などにおける雇用創出など、5項目の提言を環境省に提出しました。

モーリシャス燃料流出事故で商船三井の責任を問う

商船三井がチャーターした大型貨物船が、2020年7月にモーリシャス沖で座礁して燃料油流出事故を起こしたことを受け、グリーンピース・ジャパンは、グリーンピース・アフリカやモーリシャスのNGOと協力し、事故当初から、船主である長鋪汽船と商船三井に対して公開書簡を送り、以下の4点を求めました。

汚染者負担原則にのっとった十分な補償
第三者による調査の費用負担と公開
事故を起こした航路の使用中止
化石燃料からの撤退

© Taishi Takahashi / Greenpeace

併せて、事故を起こした企業として社会的責任を果たすよう求める緊急オンライン署名を開始しました。8月には商船三井本社前で、事故の当事者として社会的責任を徹底するよう求める「企業の責任は法的義務で終わりじゃない」と書かれた横断幕を掲げ、メッセージを送りました。その後、商船三井は、重油流出による長期にわたる汚染と環境や生計の回復について、たとえ傭船者であっても事故の当事者として社会的責任があるとし、10億円の拠出と長期的視点で事故からの回復に向き合うという、注目すべき長期的な方針を打ち出しました。

© Christian Braga / Greenpeace

アマゾンの森を守り、気候危機の加速を止める

牛や大豆などの家畜のエサを育てるために、アマゾンの森に人為的に火が放たれ、森林が切り開かれています。貴重な生態系が脅かされているだけでなく、地中に蓄えられていた炭素が空気中に放出されることで、気候危機を加速させています。

グリーンピースは、藤原しおりさんをナビゲーターにお迎えして、日本の私たちとアマゾンの森林破壊のつながりを解説する動画を制作し、藤原さんと一緒に一般向けの勉強会を開催しました。他にも、このキャンペーンに賛同する水沢アリーさん、海月ダンテさん、未来リナさんの3名が賛同人として、署名に名を連ねてくれました。

工業的に生産された肉や乳製品の大量消費が、どのように私たちの健康、動物たちの命、水資源、そして工業的畜産に関わる労働者の権利に影響を与えているのか情報を発信し、食生活を見直すための問題提起をしました。

また、日々の食生活を見直すことにとどまらず、グリーンピースの国際キャンペーンに参加して、世界中の人々と力を合わせてアマゾンの森を保護する枠組みを求めることを呼びかけ、日本各地から6,000人以上が賛同しました。

発行物・報告書

脱炭素エネルギー投資が求められる東アジアの『ネット・ゼロ』
ー 2050億ドルにのぼる東南アジアの再エネ市場

日中韓3カ国は今年9〜10月、相次いでCO2排出実質ゼロ（ネットゼロ）を表明しました。ただ、3カ国は海外の石炭火力発電事業に対して世界最大の資金提供を行っており、こうした海外のエネルギー投融資でもネットゼロ目標が反映されなければ、引き続き気候危機を助長することになります。

本報告書では、日本・中国・韓国の公的・民間金融機関の海外投融資をめぐる課題を分析し、化石燃料から再生可能エネルギーへの投融資の転換について提言を行っています。その際、3カ国のエネルギー投融資と強い結びつきがあり、近年再生可能エネルギー市場が大きく成長している東南アジアを、資金の受取国側の事例として取り上げています。

Fool's Gold　石炭は黄金にあらず
ー 欧州の石炭産業の命脈を保つ日本の金融機関

日本のメガバンク、みずほフィナンシャルグループ（みずほ）、三井住友フィナンシャルグループ（SMBC）、三菱UFJフィナンシャル・グループ（MUFG）は、欧州の石炭火力発電関連企業に計約19億ユーロの融資を行っています。本報告書では、このような支援が、再生可能エネルギーへの移行の妨げになるだけでなく、石炭需要の低下の加速とともに、化石燃料の座礁資産を生み出す危険性があると指摘しています。

© Noel Guevara / Greenpeace

Good Life

使い捨てごみの出ない循環する社会へ

仮に世界の企業や各国政府が進めるリサイクルなどのプラスチック対策が上手くいったとしても、2040年には海へ流れるプラスチックごみは今の2倍以上になるという試算があります。つまり、使い捨て製品そのものを大幅に減らさないと、リサイクルを向上させても、海洋汚染などプラスチックごみ問題解決への効果は限定的だということです。リデュース（削減）、リユース（再使用）を基本とした、「脱使い捨て」の社会に移行しなければいけません。

新型コロナウイルス感染症対策でプラスチックごみが増え、リユースへの衛生不安がある中、グリーンピースはアメリカのNGOと協力して、世界の保健衛生専門家130名の声を集め、「使い捨てプラスチックは本質的に安全とはいえず、リユース容器なども基本的な衛生管理を行うことで、感染症流行時でも安全に利用できること」を明らかにしました。人間の健康は健全な地球環境によるところが大きいため、地球環境も私たちの健康も一緒に守っていく必要があります。

先進国のプラスチックごみ輸出が途上国に与える影響

先進国で排出されるプラスチックごみが海を渡って、環境汚染や健康被害を引き起こしています。これまで大量のプラスチックごみが「リサイクル処理」の名目で海外に輸出され、適切な処理がされていると言われてきました。しかし、実際は多くの汚れたプラスチックが含まれており、そもそもリサイクルできず、大量のごみを処理しきれない輸入国で、環境汚染や健康被害の原因となっています。

世界中から多くのプラスチックごみ輸入を引き受けていた中国は、こうした状況を受けて2018年に輸入を禁止しました。その後日本をはじめとする先進国は、東南アジアなどの国々へ輸出先を変更しました。その結果、環境汚染と健康被害がそれらの国々でも広がっていることがグリーンピースの現地調査から明らかになりました。 輸入国の一つであるマレーシアで調査を行い、違法埋め立てや野焼きなど、適切に処理されないプラスチックごみによる環境や人の健康への影響の可能性をまとめた報告書を発表しました。

© Nandakumar S. Haridas / Greenpeace

市民の多くが使い捨てプラスチックが過剰と回答

コロナ禍で家庭からの使い捨てプラスチックごみがさらに増え続けています。グリーンピースは「使い捨てプラスチック製品や容器包装に関する意識調査」を行いました（国内在住の1000人対象）。暮らしの中で「不要な使い捨てプラスチック製品や過剰包装のサービスが多いと感じる」と答えた人が8割以上、「使い捨てプラスチックを使わないための選択肢があれば利用してみたい」と答えた人も、7割を超えました。また、全体の6割以上が「日本でもレジ袋の有料化だけでなく、他の使い捨てプラスチック製品について、使用規制や有料化を進めるべき」と考えていることも分かりました。

プラスチックごみ問題の解決のためには、容器包装を中心にプラスチック製品の生産総量を大幅にリデュース（削減）し、リユース（繰り返し使える容器の利用など）を推進することが不可欠です。今回の結果から、リデュース、リユースを通じた脱使い捨て社会の実現は、人々の声に応えることにもつながるということが言えます。

© Patrick Cho / Greenpeace

使い捨て社会からの脱却、循環型社会の実現を

日本政府は2019年に「プラスチック資源循環戦略」を策定しました。グリーンピースも草案の段階から提言などを重ね注目していましたが、残念ながら根本的な解決につながる戦略にはなりませんでした。

2020年はレジ袋の有料化や、今後の具体的施策の基礎になる「今後のプラスチック資源循環施策の基本的方向性」も策定されました。グリーンピースは「減プラスチック社会を実現するNGOネットワーク」の参加NGO11団体や賛同団体と共に、基本的方向性への提言活動を行い、笹川環境副大臣と直接話をする機会を得ました。その後、公明党、立憲民主党、経済産業省へも提言を行いました。

しかし、いまだ政策の中心はリサイクルと代替品への移行であり、肝心の大幅な削減と使い捨て社会そのものからの脱却への道筋は見えません。2021年はいよいよプラスチック法案議論も開始し、根本的な取り組みを進めるためにさらに重要な年になります。使い捨てない、循環型社会の実現を目指して、引き続き提言活動を行っていきます。

ファッションと環境問題に関する報告書発表

近年日本でも、ファッションの環境負荷への関心や、業界のサステナビリティへの意識が高まっています。2020年10月、ファッションと環境問題に関する報告書の日本語版2点『ファストファッションを、もっとスローに』と『ファッションをデトックス－有害化学物質ゼロを目指した7年間の歩み』を発表しました。これらは、グリーンピース・ドイツが2016年、2018年に発表した報告書の翻訳版です。

© Lu Guang / Greenpeace

発行物・報告書

リサイクルという神話2.0
ー マレーシアでの廃プラ環境汚染と健康への影響

2018年の中国による禁輸措置後、東南アジアを中心とした国々に日本を含む先進国の廃プラスチックが輸出されるようになりました。グリーンピースは2018年、輸入された廃プラスチックが適切にリサイクルがされていない状況を調査し世界中に伝えていました。

グリーンピースはその追跡調査を2019年7～8月に行い、輸入された廃プラが現地の環境と人の健康に与える有害な影響を調べ、本報告書にまとめました。調査はグリーンピース・マレーシア事務所が主導し、欧州、アジアの国々の事務所も参加しました。4つのごみ捨て場内とその周辺計10カ所で採取した水と土壌のサンプルを、英国のエクセター大学内にあるグリーンピース研究所の科学者が検査し、サンプルの化学分析を行いました。

ファストファッションを、もっとスローに

2000年以降爆発的な拡大を遂げたファストファッションにより、衣料品生産は倍増し、大量に消費・廃棄される時代に。有害化学物質の使用、温室効果ガスの排出、地球資源の消費や廃棄物問題、人権問題など、複合的で深刻な課題を概説。

ファッションをデトックス
ー 有害化学物質ゼロを目指した７年間の歩み

衣料品の生産過程で使用される有害化学物質による汚染から河川や海洋を守るために、グリーンピースは2011年から大手衣料品ブランドに対して、2020年までに有害化学物質の使用・排出ゼロを目指す「デトックス・キャンペーン」を世界中で展開。衣料品業界に変革をもたらしたキャンペーンの7年間の軌跡をまとめました。

© Petr Zewlakk / Greenpeace

Global Campaign

世界のグリーンピースと力を合わせて

グリーンピースは世界55の国と地域で活動しており、2020年も世界中にあるオフィスと連携して、地球規模で起きている環境問題の解決に取り組んできました。気候変動による災害は日本だけでなく、世界中で発生しています。2019年にオーストラリアで起きたような大規模な森林火災は、ロシアや北米でも起きています。

また、2020年6月20日、地球上で最も寒いと言われる街ベルホヤンスクで摂氏38度を観測。北極圏の過去最高気温となりました。大量のCO2を排出する石炭火力発電や、プラスチック・紙などの使い捨てに依存し続けていることは、気候変動を加速し、動物たちのすみかと命を奪い、私たちの暮らしを脅かしています。グリーンピースはこれからも、気候変動を抑えるために、世界中の人々と連携して活動を続けます。

気候危機をくいとめるために森をまもる

2019年から続くオーストラリアの山火事は、2020年に入っても止まる事を知らずにオーストラリア全土に広がりました。オーストラリアで山火事は珍しいことではありません。しかし、オーストラリア国立大学気候変動研究所の専門家は「気候変動が山火事をさらに深刻に、さらに頻繁にしているという証拠だ」と話しています。

グリーンピースは国際署名を開始し、オーストラリア政府に対して、山火事を気候変動の緊急事態だと認め、気候変動の最大の原因の一つである石炭の利用をやめることを求め、日本を含めカナダ、ニュージーランド、ロシア、ポーランド、チェコ、フィンランド、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、ベルギー、イスラエルなど世界各国の大使館に提出しました。これまで気候変動対策に消極的だったオーストラリアの政治家数人が、気候変動対策をより優先すべきだという姿勢を見せ始めました。

© Paul Hilton / Greenpeace

海の生態系を守り、回復させるために

CO2や熱を吸収し、気候を安定化させている海ですが、その生態系は、過剰漁業や資源採掘、プラスチックごみなどにより破壊が進んでいます。猛威を増す気候危機の下で、海の生態系の保護・回復は不可欠です。

2030年までに世界の海の30%を保護する（30×30）ための世界海洋条約の採択に向けて、グリーンピース

は、国際署名や科学レポート発表、国際交渉でのロビー活動の他、科学者や若者たちと共に北極から南極まで船での調査とキャンペーンのツアーを実施、世界の希少な生態系や、経済活動や気候変動が海に与える脅威などを発信してきました。

署名は世界で350万筆を超え、2020年3月には日本でも国内分を環境省に提出しました。日本にとって「30×30」は高いハードルですが、海の生態系を守るためにも日本政府が参加することはとても重要なことです。

グリーンピースの船が北極海で海氷面積などを観測

グリーンピースは定期的に極地に船を派遣し、世界中の科学者たちと一緒に海氷の状態を詳しく調べる調査活動をしています。2020年も夏に北極圏での調査を行いました。北極を覆っている海氷は面積も厚さも、過去数十年にわたって一貫して縮小していることがわかりすでにその3分の2が失われたことがわかっています。

原因は地球温暖化です。北極を訪れたグリーンピースの船「アークティックサンライズ号」には、18歳の鳥類学者で環境活動家のマイア・ローズ・クレイグも乗船し、北緯82度の流氷の上で最北端の「気候ストライキ」を行いました。グリーンピースは、環境破壊をくいとめ、2021年に世界海洋条約を確実に採択させるという目標を掲げ活動を続けていきます。

ウミガメ一家が訴えかける海の危機

国際的な海洋条約によって世界の海を守るグローバルキャンペーンの一環で、「ウォレスとグルミット」や「ひつじのショーン」を手掛けてきた英国の「アードマン・アニメーションズ」とグリーンピースが短編アニメーションを共同制作しました。

「HOME ～あるウミガメ一家の物語」は、家に帰ろうとする愛らしいウミガメ一家の物語を通して、気候危機、プラスチック汚染、石油掘削や乱獲など、海が直面する危機を伝えています。

英語で制作されたオリジナルアニメーションの日本語吹き替え版には、森星さん、NOMAさん、四角大輔さん、小橋賢児さん、MINMIさんの5人が声優として協力してくれました。5人の著名人による協力、そして渋谷の街頭広告などを行った結果、86万回を超える再生回数となっています。

© Kengo Yoda / Greenpeace

Events

行動する仲間とつながる・輪を広げる

「環境問題に関心があってもまわりとなかなか話す機会がない・・・」そんな声をよく聞きます。グリーンピース・ジャパンでは、環境問題に触れたり行動したりする機会を作り、多様なアイディアを持つ人々を繋げるために、様々なイベントを企画しています。

専門的なセミナーや勉強会、学んだことを生活にいかすワークショップまで多岐に渡るイベントを開催し、環境問題をどうにかしたい、もっと知りたい、と思う人々が繋がり、グリーンピース と一緒に行動する仲間を増やしています。学校などでの出張講義も随時行い、環境教育にも取り組んでいます。

感染症が明らかにしたこれからの暮らし

国立環境研究所で生物多様性を専門とする五箇公一さんと、幸せ経済社会研究所所長で地域経済を専門とする枝廣淳子さんをゲストスピーカーにお迎えし、新型コロナウイルス感染症から見えた今の世界、そしてこれからの暮らしについてお聞きするクロストークイベントをオンラインで開催しました。

130人を超える参加者が集まり、一極集中型から地域分散型の社会への転換、人間と自然の領域を線引きする「エコロジカルディスタンス」の考え方、この先似たようなウイルスを広めないためのウイルスとの共生策など、これからの社会のあり方、そしてこれからの暮らしについて包括的な視点を伝えていただきました。

お肉と気候変動と私たちの食生活

お肉の生産とアマゾンの熱帯雨林が失われていることのつながりをタレントの藤原しおりさんが分かりやすく解説した動画「なぜアマゾンの森は燃えているの？」を制作し、800億トンから1200億トンの二酸化炭素を蓄積するといわれているアマゾンの熱帯雨林の保護をブラジル政府に求めました。

藤原さんをゲストに迎え、100人以上が参加したオンラインイベントでは、お肉の量を減らす食生活が気候変動の悪化を食い止めるためにできるアクションの1つであることを伝え、藤原さんやイベント参加者が、それぞれの立場で気候変動や森林保護のために前向きに取り組んでいることを共有するイベントとなりました。

使い捨てプラスチックの本当の代償

人間によって引き起こされたプラスチック汚染による地球への影響や人々への健康被害など、世界規模で起こっている様々な影響を取り上げたドキュメンタリー映画『THE STORY OF PLASTIC』を日本でも多くの方々に見てもらうため、プロダクションの The Story of Stuff Project と協力して日本語字幕を制作しました。

この映画では、プラスチックが世界のあらゆる場所を蝕んでいる悲惨な現状と、この問題を受けて立ち上がり、最前線で活躍する専門家や活動家へのインタビューなどが取り上げられています。 グリーンピース・ジャパンは上映イベントを2020年に複数回開催し、150名以上の方が映画を視聴しました。プラスチック問題について学び、行動する仲間の輪が広がり続けています。

「捨てるしかない」から「まだ使いたい」へ

MAKESMTHNG（メイクサムシング）は、捨てる前に直したり、誰かと交換したり、新品を購入する前に、自分で作ったり、セカンドハンドでお気に入りを見つけたり、そんな一人ひとりのクリエイティビティを活かしながら、消費による気候変動への影響を楽しく減らしていくムーブメントです。

2020年は、ファッションをテーマに3つの団体と一緒にイベントを開催しました。明治学院大学の学生とは、1day ボランティアプログラムの一環としてエコバッグ作りワークショップ「Remake your clothes! 思い出の洋服をエコバッグへ」を実施。ユニバーサルリサーチラボ（URL）のファシリテーションにより GRID CINEMA として開催した、『ザ・トゥルー・コスト ～ファストファッション 真の代償～』上映会＆トークイベントは、70名以上が参加しました。にっぽんてならい堂とは、大切にしていた洋服を裂いて織物をつくる裂き織ワークショップを開催しました。

一人ひとりの持つ「もったいない」と思った気持ちを、環境負荷を減らすスキルやアイディアに変える機会をつくることができました。

仲間とつながる、輪を広げる

2020年は、グリーンピース・ジャパンとともにご寄付を通して活動してくださる寄付者の方々と、一緒に行動する仲間の輪をさらに広げるための、素晴らしい機会を生み出すことができた1年となりました。

活動紹介と寄付を募るリーフレットを一緒に作り100人以上のご友人へ配布し、国際ソロプチミスト立川の

会員として総会での講演会を企画してくれた武本知子さん。アクションを起こす人を増やそうと専門スキルを活かしてイベントを多数開催してくれた、活動グループ「気候Switch」中心メンバーの桑原香苗さんや古江強さん。MAKESMTHNG（メイクサムシング）プロジェクトの一環で映画上映会を企画・主催してくれたユニバーサルリサーチラボ主催の浦野真理さん。

ご寄付だけでなく、活動の輪を広げるために一緒に考え、行動してくださる方々とのコラボレーションから、新たな出会いが生まれています。過去は変えることができませんが、未来は変えられる。「わたしたち」なら、みんなと一緒なら、できる！そんな思いで、2021年も寄付者やサポーターの皆様と、活動を進めてまいります。

2021年2月に開催された「キコウキキ x わたしたちのしあわせ」イベント。気候Switch中心メンバーと登壇者と。同イベントでは参加費の一部をご寄付いただきました。

Volunteer & Internship Activity

ボランティア & インターン

ボランティアとインターンは、グリーンピース・ジャパンが目指す社会を一緒に作っていく仲間です。それぞれのアイデアやスキルを活かして、地球の恵みを100年先の子どもたちに手渡せる社会の実現に向けて、様々な活動を行なっています。

オーストラリア大使館前で気候変動を訴える

オーストラリアでは、2019年9月から起こっている前例のない大規模な山火事により、1,100万ヘクタール近くが焼け、少なくとも29人、10億匹以上の動物が命を落としました（2020年12月時点）。2020年2月には、ボランティアのみなさんと一緒に、オーストラリア大使館前でアクションを行い、6,636人の方の署名と、オーストラリア政府に対し気候変動を抑える

© Greenpeace

行動を求める書簡を提出し、私たちが感じている危機感を世界のリーダーに伝えました。

街中に氷のペンギン出現！

2030年までに世界の海の3分の1以上を保護区にする海洋保護条約に、日本政府が賛同することを求める署名を行っています。これに合わせ、東京・新宿の真ん中に、氷で作られたペンギンを置くアクションを、インターン主導で行いました。このペンギンは気候変動によって南極の氷が溶けたり、雨の量が増えることでペンギンの体温維持が難しくなるなどの問題を表現するために作ったものです。道行く人々にこの問題を知ってもらうため、インターンとボランティアで街の人に声をかけ、写真を撮って広めるよう呼びかけました。

© Taishi Takahashi / Greenpeace

ボランティア勉強会

ボランティア登録者向けの勉強会やミーティングを毎月オンラインで開催しています。毎回30名程度参加し、企画運営は有志で集まったチーム「Side by Side」が行なっています。7月は気候変動と食、8、9月は平和問題、10、11月はSDGsや企業の取り組み、12月はエネルギーをテーマに開催しました。2021年はさらにパワーアップして活動を続けていく予定です。

学生が「働く×エコロジー」を考える

学生ボランティアチーム「プラフリー大学」主催で、環境問題に関心のある学生が学び、つながれるオンラインイベントを開催しました。生活の中でできるゼロウェイストの工夫をSNSに投稿する企画や、環境問題に取り組む学生団体とのコラボインスタライブ、エシカルな企業に就職した先輩を呼んだトークイベントなどを開催しました。2021年はチームメンバーを増やし、さらに多くの活動ができるよう準備中です！

レスミートな食生活をSNSで発信

ボランティアチーム「チームプランツ」は、体にも地球環境にもいい「レスミート（お肉を減らす）」を日本に広めるため、野菜中心の食習慣の魅力を、オンラインイベントやSNSを通して伝えています。インスタグラムでは、レスミートレシピを写真と一緒に投稿しています。

アンバサダー

「地球の恵みを100年先の子どもたちに届けたい」という思いをグリーンピース・ジャパンとともに広く伝えるパートナーとして、「グリーンピース・ジャパンアンバサダー」を2020年10月に創設しました。初代アンバサダーには、プロダイバーで環境活動家でもある武本匡弘さん、ニュージーランド在住の執筆家である四角大輔さんのお二人が就任しました。武本さんと四角さんは、これまでも気候・エネルギーキャンペーンや海洋生態系キャンペーンなど、多岐にわたるグリーンピースのキャンペーンを応援しています。

これからの環境アクティビズムを共に

11月に就任記念イベントとして、アンバサダーのお二人と事務局長サム・アネスリーとの対談をオンラインで開催しました。100名を超える参加者と、グリーンピース・ジャパンのこれまでの30年を一緒に振り返り、これからの30年について、そして次世代に手渡し続けたい暮らし、環境アクティビズムのありかたについて語り合いました。お二人の就任ブログ「気候危機に立ち向かう、グリーンピースと共に地球環境と調和する活動を！」（武本匡弘さん寄稿）、「ぼくはただ、この青い星が大好きなだけ。」（四角大輔さん寄稿）もぜひご覧ください。

武本さんとプラスチック汚染の現場から

ヨットで太平洋を航海し、気候変動や海洋汚染などの現場を直接見て、セミナーや講演会を通して環境汚染を長年伝えてきた武本さんと一緒に、東京湾でマイクロプラスチック採取を一緒に行いました。武本さんによる船内ツアー、顕微鏡からのぞく海のプラスチック汚染の状況などを武本さんのインタビューとともに生配信しました。

© Taishi Takahashi / Greenpeace

四角さんによるグリーンピース・アオテアロア訪問

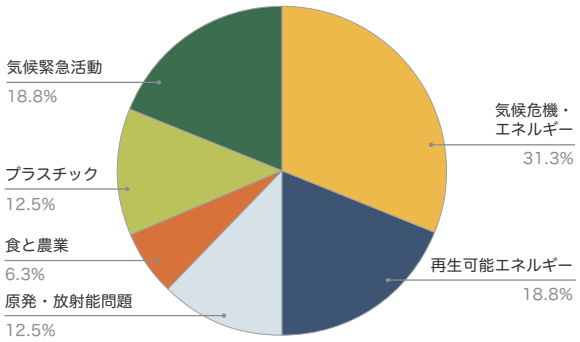
ニュージーランドの原生林に囲まれた持続可能な暮らしを実践している四角さんが、グリーンピース・アオテアロア（ニュージーランド）のオフィスを訪問しました。海洋生態系と気候変動・エネルギーの両キャンペーナーと対話し、海を守るための国連への働きかけについて、そして、再生可能エネルギー80%以上のニュージーランドの政策など、見聞きしたことを自身のSNSから発信しました。グリーンピースの国境を超えた環境保護活動、そこで働くスタッフやオフィスの様子を、写真と言葉とともに多くの人に届ける機会となりました。

会計報告

グリーンピース・ジャパンの2020年度（1月〜12月）における財務報告書は、国際会計基準（IFRS）に準拠して作成され、RSM清和監査法人により会計監査を受けたものです。2020年度は昨年に引き続き、本部であるグリーンピース・インターナショナルに加え、海外支部、および個人基金等からも人的・資金的な支援を得て、独立した国際環境NGOとして地球規模の環境問題に関する啓蒙活動を行い、持続可能でグリーンで平和な未来のための提案を行いました。

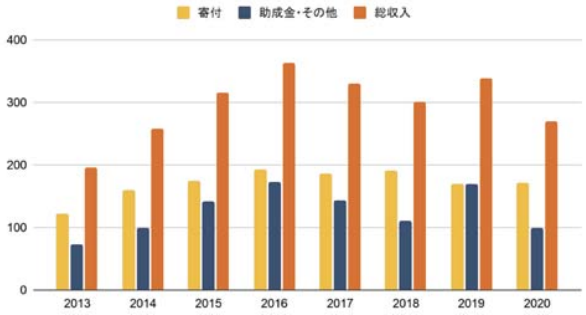
2020年は気候変動問題、再生可能エネルギー、原発・放射能問題、プラスチック問題などに精力的に取り組みました。

2020年　活動内容別 内訳

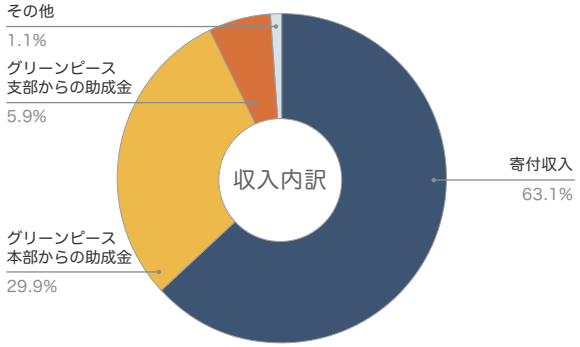


今年度、グリーンピース・ジャパンの収入は本部および海外支部からの支援が減ったため、前年度と比べて47%減りました。新型コロナウイルス感染症の拡大が全世界に大きな影響を与えた年だったにかかわらず、その他の収入は前年度と同程度の規模となりました。2020年の総収入は2.7億円でした。

2013年〜2020年　収入額と内容内訳
（単位：100万円）

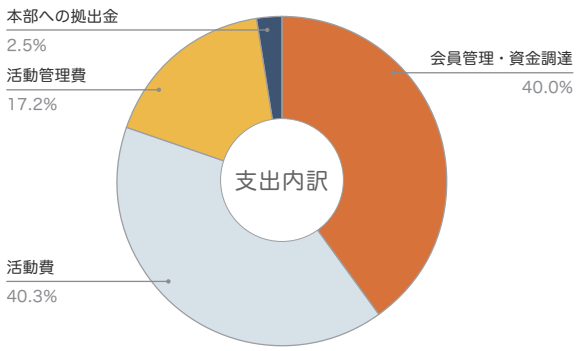


2020年　収入内容 内訳

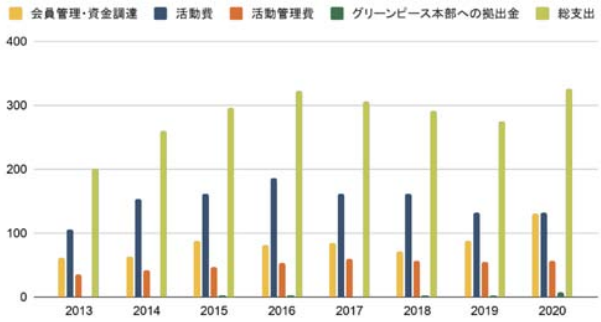


総支出はデジタル・ファンドレイジング分野での新しい投資があったため前年度より18%増加しました。その他の支出は前年度と同程度の規模となりました。2020年の総支出は3.25億円でした。活動収支は5400万円の損失となり、グリーンピース・ジャパンの基金残高によって補われました。

2020年　支出内容 内訳



2013年～2020年　支出額と内容内訳
（単位：100万円）



グリーンピースは企業や政府から一切の資金援助を受けていない国際環境NGOです。この独立した立場を保つには個人からのご寄付が不可欠です。気候危機をとめ、生物多様性をまもるため、自然エネルギー100%の循環型社会を目指す活動することができました。グリーンピースの活動を支えてくださった多くの皆様に、心より感謝申し上げます。

賃借対照表（2020年12月31日現在）
（単位：千円）

資産		
流動資産		164,020
固定資産		
有形固定資産		1,075
無形固定資産		1,107
投資有価証券		405
その他 資産		530
資産合計		**167,137**
負債		
流動負債		38,618
固定負債		0
負債合計		**38,618**
正味財産		
正味財産合計		**128,519**
負債および正味財産合計		**167,137**

収支計算書（2020年1月～12月31日）
（単位：千円）

収入		
寄付収入	113,580	
グリーンピース本部からの助成金	80,856	
グリーンピース支部からの助成金	15,608	
財団からの助成金	57,505	
その他 収入	0	**267,548**
活動費用および活動支出		
活動費	131,008	
会員管理、資金調達	129,654	
活動管理費	55,956	
グリーンピース本部への拠出金	7,017	
グリーンピース支部への拠出金	773	**324,407**
活動収支		**(56,859)**
活動外収入		
受取利息	0	
雑収入	2,947	**2,947**
活動外費用および支出		
為替差損	1	
有価証券評価損	15	**16**
税引前収支		**(53,928)**
事業税	70	
税引後収支		**(53,998)**

※ グリーンピースは石炭火力発電から自然エネルギーへの投資のシフト、そして脱原発を求め、株主総会への参加・議決権行使などのために、東京電力、三菱UFJ銀行、三井住友銀行、みずほフィナンシャルグループの株式を最小単位で購入しています。

グリーンピース・ジャパン 概要

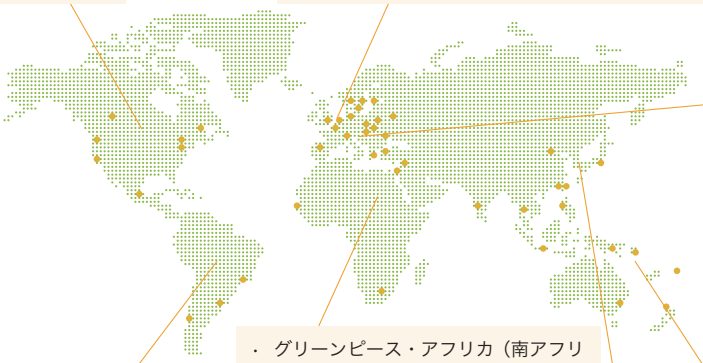
【名　称】 一般社団法人 グリーンピース・ジャパン
【所在地】 〒160-0023　東京都新宿区西新宿8-13-11 NFビル2F
【設立年月】 1989年4月
【代表者】 代表理事：青木 陽子、寺中 誠
【事業対象分野】 地球環境保護（気候変動／エネルギー／原子力問題、海洋生態系保護、農薬問題、有害物質問題、森林問題等）
【活動対象範囲】 全世界
【組織の目的】 地球規模の環境破壊を止めること
【具体的な活動手法】＊ 環境破壊の実態を科学的に調査・分析し公表　＊ マスメディア、市民メディア、会員への情報提供
＊ 環境破壊を止めるための行動の呼び掛け　＊ 環境破壊の現場に行き、抗議活動　＊ 政府・企業などへの提案・要請
＊ 環境問題を解決に導くための代替案の提示　＊ 国際条約の交渉過程を監視、提言
【方　針】 非暴力行動・政治的独立・財政的独立
【会　員】 約6,910人（国内）、約300万人（世界全体）　※2019年12月時点
【事務局】 国内有給職員 35名 （うち、時間給制職員13名）
【本部所在地】 オランダ・アムステルダム（日本を含む世界55以上の国と地域で活動。有給職員約3,895名）

世界に広がるグリーンピース

- グリーンピースUSA
- グリーンピース・カナダ

- グリーンピース・インターナショナル（本部：オランダ・アムステルダム）
- リーガル（法律）ユニット（ベルギー・ブリュッセル）
- グリーンピース・リサーチ研究所（英国・エクセター大学内）

- グリーンピース・オランダ
- グリーンピース・ベルギー
- グリーンピース・ルクセンブルグ
- グリーンピース・UK
- グリーンピース・フランス
- グリーンピース・ドイツ
- グリーンピース・スイス
- グリーンピース・北欧（デンマーク／ノルウェー／フィンランド／スウェーデン）
- グリーンピース・ギリシャ
- グリーンピース・イタリア
- グリーンピース・スペイン
- グリーンピース・チェコ
- グリーンピース・ロシア
- グリーンピース・中欧／東欧（オーストリア／ブルガリア／クロアチア／ハンガリー／ポーランド／ルーマニア／スロヴァキア／スロヴェニア）
- グリーンピース・地中海（イスラエル／トルコ）



- グリーンピース・メキシコ
- グリーンピース・ブラジル
- グリーンピース・アンディーノ（アルゼンチン／チリ／コロンビア）

- グリーンピース・アフリカ（南アフリカ／セネガル／コンゴ／ケニア）
- グリーンピース・中東＆北アフリカ（ベイルート）

- グリーンピース・東南アジア（インドネシア／フィリピン／タイ／マレーシア）
- グリーンピース・インド
- グリーンピース・ジャパン
- グリーンピース・東アジア（北京／香港／台北／ソウル）

- グリーンピース・オーストラリア・パシフィック（オーストラリア／フィジー／パプア・ニューギニア／ソロモン諸島）
- グリーンピース・ニュージーランド

© Jana Eriksson / Greenpeace

あなたの思いを力に、活動しています

独立・中立の立場から環境問題の解決を目指すグリーンピースの活動は、この報告書に掲載された成果を含めてすべて、地球の未来をまもりたいと願う個人の皆さまのご支援のみに支えられています。心より感謝申し上げます。
誰もが安心して暮らせる緑豊かで平和な社会を、あなたのご寄付で実現してください。

ご寄付はインターネット・スマートフォンでお申込みいただけます。

03-5338-9810
supporter.jp@greenpeace.org

国際環境NGO グリーンピース・ジャパン
GREENPEACE

〒160-0023　東京都新宿区西新宿8-13-11 NFビル2F　Tel. 03-5338-9800　Fax. 03-5338-9817
www.greenpeace.org/japan

@GreenpeaceJP　GreenpeaceJapan　greenpeacejp